

コロンブス上陸の地と ベネズエラの真珠の歴史

山田 篤美

コロンブスが最初に上陸した南米大陸はどのような土地だったのだろうか。そう思って決行したが、ベネズエラのパリア半島へのドライブだった。パリア半島は、南米大陸の北東部から真東に伸びている細長い半島である。半島北岸はカリブ海に接し、南岸はパリア湾に面している。この半島は熱帯雨林気候となっていて、雨が多いため、今日ではカカオ栽培で有名である(図1)。しかし、車で走っている限り、庇陰樹の中にあるカカオ農場には気がつかない。圧倒されるような緑の樹木の中をただドライブすることになる。

パリア半島は、コロンブスが最初に到達した「新大陸」の土地であった。彼は1492年に「新世界」を「発見」したが、その「新世界」はカリブ海の島々であり、「新大陸」にまで到達したのは、第三回航海時の1498年だった。パリア半島の突端近くにあるマクロという土地に、ヨーロッパ人、すなわちコロンブスの一行が初めて降り立ったと考えられている。

日本や他の国々だったら、そうした歴史的由縁を大きく喧伝するだろう。ただ、私がベネズエラに暮らし、この地を旅行していた20世紀の終わりの時期は、マクロは船でしか行くことのできない辺鄙な土地となっていた。生い茂る熱帯雨林のため、半島の突端までの道が通っていなかったのである。したがって、パリア半島のド

ライブは建造物や記念碑などをめぐるのではなく、ただ道路を走るだけとなる。ベネズエラでは、代わり映えせず、何もないように見える土地に歴史が刻印されていることが少なくない。

パリア半島に刻印されているもうひとつの歴史的意義は、この地における真珠の発見であった。実はパリア半島北岸から西に続くカリブ海沖には、西日本に生息しているアコヤガイと同じ真珠貝が生息していた。先住民は大航海時代が始まる以前から海に潜って真珠貝を採取し、その真珠を愛好していたのである。

コロンブスは航海を実施するにあたり、真珠の獲得を主要な目的のひとつとしていた。彼がスペインのイサベル女王とフェルナンド



図1：パリア半島の力カオの木（筆者撮影）

国王と1492年にグラナダ郊外で結んだ「サンタフェの協約」によると、航海でもっとも期待されていた物品は「真珠、宝石、金、銀、スパイス」だった。真珠が冒頭に来ていることに注意しよう。真珠は古代ギリシア・ローマ時代からヨーロッパでは最高の宝石のひとつだった。コロンブスは西回りの航海でオリエントに着くことを考えていたので、当初の予定では日本が最初の目的地だった。その日本は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』によって金と真珠の産地として知られていた。つまり、コロンブスは、航海の最初の段階で日本の金と真珠を獲得できると信じていたのである。

第一回航海と第二回航海ではコロンブスは金は獲得できたものの、真珠は発見できなかった。しかし、第三回航海でパリア半島に到着し、先住民たちが真珠の装身具をつけていることを目撃した。当時の人の記録によれば、彼らが鈴や針などの安物の品々を差し出すと、先住民は喜んで真珠と交換してくれた。これがパリア半島を舞台にしたヨーロッパ人によるベネズエラの真珠発見という歴史的な出来事であった。

私自身は20世紀末から21世紀初めにかけて夫の仕事の都合でベネズエラに滞在した。各地を回り、歴史のエピソードを調べているうちに、この国のさらなる歴史

を探る文献渉獵の旅を開始することになった。カラカスの国立図書館 (Biblioteca Nacional) やワシントンの議会図書館、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーなどが私のアーカイブ・リサーチの中心となった。日本では多くのラテンアメリカ関係の一次史料が翻訳されているので、それらもほとんど目を通した。

一次史料の中でもっとも印象的だったのが、16世紀の聖職者バルトロメ・デ・ラス・カサスの『インディアス史』だった。ラス・カサスといえば、スペイン人コンキスタドールの暴虐を暴き、インディオを擁護した人物として知られている。私自身もそのような認識で『インディアス史』を読み始めたが、この書物が後半に向かうにつれ、主要なテーマとなってくるのが、ベネズエラの真珠をめぐる話であったことに驚いた。

実際、ラス・カサスは、コロンプスの真珠の発見で起こったその後の歴史を詳細に記している。ス

ペイン宮廷で真珠発見の噂が広まると、ベネズエラの海岸には多くのコンキスタドールが押し寄せた。彼らは先住民を攻撃し、殺戮することで、彼らの真珠を奪っていった。さらにスペイン人はベネズエラの無人島に住みついて、真珠採取を実施するようになった。

ラス・カサスによると、スペイン人は素潜りが上手なバハマ諸島の先住民を拉致してきて、真珠採りに従事させた(図2)。先住民はカヌーで沖に連れていかれ、日の出から日没まで真珠貝を採らされた。水面に出て息継ぎをしていると、早く潜れと棍棒で殴られた。ラス・カサスは、真珠採りの「インディオ」は日々の生活の大部分を水の中で息をとめて過ごすため、体を壊し、血を流しながら死んでいき、結局、絶滅したと語っている。ヨーロッパ人による真珠採取という水産業の成立で、ひとつの民族が破壊されたという壮絶な歴史があることも知っておく必要があるだろう。

その後、ベネズエラの真珠採取業は南米本土の先住民やアフリカからも潜水夫を徴発し、16世紀及びそれ以降も真珠採取を実施してきた。特にアフリカ人は奴隷として連行され、真珠採取地に運ばれた。砂糖栽培よりも以前に真珠による大西洋奴隷貿易が形成されていたのである。真珠採取業は局所的な水産業ではなく、潜水夫の調達などを外部に求め、世界を接続させていたグローバルな産業だった。

19世紀末から20世紀初めにかけて真珠の価格が高騰すると、今度はベネズエラのマルガリータ島を中心に真珠採取業が再び活況を呈するようになった。この時期になると、真珠採取業は現地の漁民によって担われていた。潜水も実施されていたが、主流となったのは底引き網の使用であった。当時、400隻程度の真珠採取船が操業しており、マルガリータ島東南部のポルラマールが真珠取引の中心地だった。

真珠採取はその後も続いていたが、1960年代になると急速にすたれていった。その大きな要因となったのが、世界を席卷しつつあった日本の養殖真珠だった。コロンブスは日本の真珠を探していたが、ベネズエラの真珠を発見したが、それから450年後、日本の養殖真珠がベネズエラの真珠採取業にとどめをさすことになった。日本とベネズエラは真珠を通して意外な縁があったと言えるだろう。

ベネズエラでは養殖真珠事業も試みられたことがあった。1990年代初め、米国ニュージャージー州の会社がマルガリータ島沖合で真珠養殖事業を開始した。彼らの当初の計画では大粒の真珠が採取さ



図2：ベネズエラの真珠採取を描いた16世紀のイラスト
出所：Theodor de Bry, *Americae Pars Quarta*, 1594.



図3：マルガリータ島の光景（筆者撮影）

れることが喧伝されていたが、その後の情報は聞こえてこず、失敗に終わったことが推察されている。

21世紀初頭、マルガリータ島とその北東方向にあるロスフライレス諸島の海域では30隻から40隻の漁船が底引き網で真珠貝を採取していたことが知られている。真珠貝採取の目的は変わり、真珠貝は食用の貝として採取されるようになった。食事中に真珠が見つかったと、それは発見者の儲け物で、バイヤーやジュエリーショップに売ることができる。採取業者によると、ボイルした貝の真珠であっても、その光沢は損傷しないらしい。今日の状況は不詳であるが、自家消費のような形で真珠貝が採取されているかもしれない。私がマルガリータ島をドライブした時

は、乾いた大地と静かな海が広がるばかりで、当時の真珠採取業の活況を思い出させるものは見当たらなかった（図3）。

先述したように、私はベネズエラの大地や海に刻印された歴史に関心をもった著述者だった。私のリサーチの成果は『黄金郷（エルドラド）伝説』や『真珠の世界史』（いずれも中公新書）という書物となって結実した。『黄金郷伝説』では、ギアナ高地の産金地をめぐるイギリスの侵略の歴史を明らかにした。その経緯は2014年秋号の『ラテンアメリカ時報』のこの欄で紹介させていただいた。

今年、私はベネズエラの真珠史を含む大航海時代の真珠史研究で博士号（文学）を取得した。ま

た、2021年度の大同生命地域研究特別賞も受賞した。受賞理由のひとつは、上記の書物などで、ベネズエラの真珠の歴史やギアナ高地の歴史を発掘してきたことによるものだった。気がつけば、私がベネズエラ関連の文献を読み続けて20年になる。その間、混迷を深めてきたこの国だが、これからも忘れられた歴史を明らかにし、紹介していきたいと思っている。

（編集部注）『黄金郷伝説—スペインとイギリスの探検帝国主義』は協会 Web サイト <https://latin-america.jp/archives/5669>、『真珠の世界史—富と野望の五千年』は <https://latin-america.jp/archives/5964> でそれぞれ紹介されている。

（やまだ あつみ 歴史研究者）